

江東の名所 ⑥

樹木の名所と花めぐり—亀戸—

江東区深川江戸資料館



亀戸梅屋敷 (『東京名所』小林清親画)

亀戸には、江戸以前からの寺社が多く見られます。その境内には樹木や草花が植えられ、開花の時期は特に、花をめぐる人々で大変な賑わいとなりました。行楽地として発展したまちの歴史とあわせて、代表的な樹木の名所を紹介します。

いりしんめいぐう たいへいえのき  
入神明宮の太平榎

亀戸は、江東区において最も歴史のある土地で、『江戸名所図会』「入神明宮太平榎」には、往古はこの付近まで船が入ってくる場所であり、停泊地でもあったことや、周辺の漁民が神社の神木であった榎に網をかけたことから、「網干し榎」と呼ばれたこと、土中からは江戸時代でもかつて漁網に使用したオモリが出土することが記されています。榎



入神明宮太平榎 『江戸名所図会』  
長谷川雪旦 画

の名所であったことから、『江戸名所図会』に描かれて、当時の様子を知ることができる貴重な資料になっています。

入神明宮のほかにも、江戸時代より前の創建とされる寺社が集中しており、亀戸3丁目を中心に寺町が形成されていました。後に移転してきた寺社も多くありますが、江戸時代以前から寺町が形成されていたということは、深川寺町と違った大きな特徴といえます。

亀戸梅屋敷

明暦3年(1657)の明暦の大火以後、江戸の町の拡大にともない、北十間川・竪川・横十間川など、亀戸のまちを取り囲むように掘割が開削されました。隅田川から北十間川へとつながる水路は非常に便利で、往来する舟の風情も人々に好まれました。

梅屋敷(亀戸3-56付近)は、もともと浅草埋堀(台東区)の商人・伊勢屋彦右衛門の別荘として開かれました。その家を清香庵といい、俗に梅屋敷と呼ばれていました。子孫の喜右衛門の代になると、梅は三百余株を数えるまでになりました。

数ある梅の木の中でも臥龍梅(『江戸名所図会』では

「ぐありうばい」、『江戸名所花暦』では「がりょうばい」と呼ばれる名木が最も有名で、徳川（水戸）<sup>みつくに</sup>光圀（1628～1700）が命名したといわれています。八代将軍吉宗も鷹狩の際、ここに立ち寄り鑑賞しています。花の色は白で夜間でも闇を照らすほどの艶のある花をつけていました（『江戸名所花暦』では、花は薄紅）。しかし、明治43年（1910）の水害で梅が枯れ、残念ながら廃園となっていました。

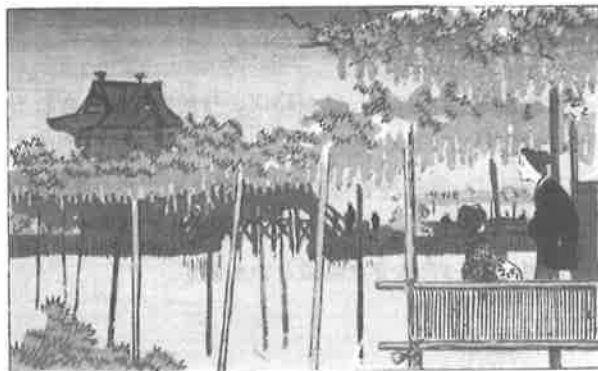
現在は、梅屋敷跡を記した案内板と、少し離れた北十間川南側の道沿いに、梅の木が植えられています。舟上から見た梅も格別で、水路を行く人々も見事な梅の花に目を奪われたことでしょう。

開発はさらに進み、掘割沿いには道路が整備され、さらには、寛文元年（1661）隅田川に両国橋が架橋されたことにより、徒歩での利便性も高まりました。

このような開発事業によって物資輸送や人の往来が容易になり、都市化が進む一方で、江戸市中に程近いこの地域は、江戸に住む人々の食料を供給する近郊農村としての側面をもっていました。亀戸大根や小松川の小松菜など、地名のついたブランド品も生れています。

## 亀戸天神社の梅と藤

田園が広がっていた亀戸には、鳥や昆虫など、さまざまな生物が集まります。“梅にうぐいす”というように、似合いの花鳥が揃えば、楽しみは倍増します。



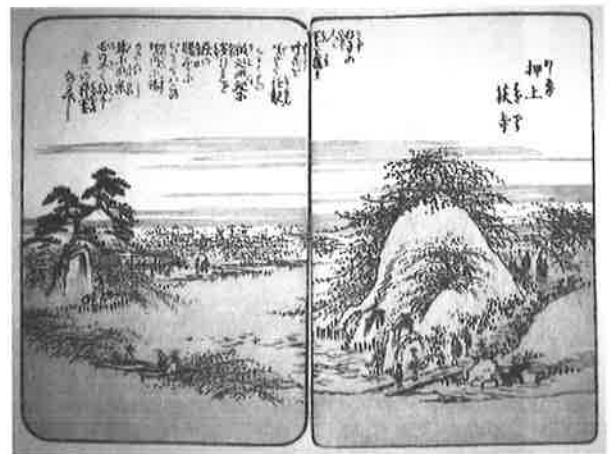
亀戸藤（井上安治 画）

次は、今日の都心において希少な翡翠（カワセミ）も飛来する亀戸天神を紹介します。

亀戸天神（亀戸3-6）は、寛文2年（1662）九州大宰府天満宮の神職が、飛梅の木で菅原道真の像を作り、祀ったのが創建といわれています。翌年に、<sup>そりし</sup>神殿、反橋、心字池など、すべて太宰府天満宮に模して造営されました。

江戸時代から学問の神様として信仰を集め、藤や梅の名所として庶民から親しまれていました。藤花は、初夏の頃に見ごろを迎え、現在でも大勢の人々で賑わって

います。『江戸名所花暦』（岡山鳥筆）には、「表門を入りて正面、一ノ反橋、この池（この池を心字の池といふ）添いて左右藤棚あり。右は末社、頓宮神の社の際まで、真盛りのころは池にうつりて紫の水を流せるがごとし」と、<sup>あふ</sup>溢れんばかりに咲いた藤花とその情景が見事に表現されています。



押上萩寺（『絵本江戸土産』歌川広重 画）

## 龍眼寺の萩

龍眼寺（亀戸3-34）は天台宗で、慈雲山無量院と号し、創建は応永2年（1395）と伝えられています。この寺の萩は、元禄6年（1693）、当時の住職の元珍によって全国から数十種類の萩が集められ、境内に植えられました。明和7年（1770）にも増殖され、萩寺と呼ばれるほど有名になりました。『江戸名所花暦』には、「萩の花ざかりには、錦をつらねたり。いまはことさら数千叢になりて、貴賤群をなして歩行をはこぶ。俗よ（呼んで萩寺といふ）」と記されています。中秋のころには多くの人々が観賞しました。満月とその月明かりに照らされた萩の花、それは美しかったことでしょう。

文人墨客も多く訪れ、なかでも、明治の国文学者落合直文は萩を愛して、みずからの雅号を萩之舎<sup>はぎのや</sup>と称し、この寺を好みしばしば来遊しました。

## 信仰と行楽の名所「亀戸」

花鳥風月とともに日本の四季を楽しむことは、これ以上ない行楽だったのでしょ。

江戸後期以後、『江戸名所図会』などが発行されると、庶民の間にも広く知られることとなり、江戸っ子たちの行楽意欲をかきたてました。

寺町の存在、のどかな田園風景、水辺環境の充実と、<sup>めいび</sup>明媚な眺望を残す場所でありながら交通の利便性も高いという、行楽地としての好条件がそろった亀戸は、こうして、信仰と行楽をかねた名所として、江戸からの人々にぎわうこととなったのです。